

インドネシアにおける観光業に対する 就労意識調査

Consciousness survey of working in Tourism industry in Indonesia.

文教大学国際学部 黛 陽子*

筑波大学生命環境科学研究科 水野谷 剛

筑波大学名誉教授 氷鉦 揚四郎

本研究では、発展途上国の世界的観光地、インドネシア、バリ島における、国家政策に始まって成長した観光業の発展と、それに伴う現地住民の生活を支える自給自足の農業の衰退、これらに応じて変わる若者の職業選択に着目している。職業選択を行う立場にある現地住民の若者の職業価値志向を知る意識調査に2015年より取り組んでいる。現在までに本研究では、バリ島住民で卒業後に就職機会をもつ可能性がある、大学生と高校生を被験者に設定し意識調査を行った。大学生の調査は2016年5月、高校生は2017年6月から2018年2月にかけて行ない、調査票を回収した大学生被験者は406名、高校生は419名であった。調査では、「職業選択の考え方」「観光業に関する職業の印象」「農業に関する職業の印象」「農業と観光業の融合（アグロツーリズム）の印象」等に関する内容、大学生に関しては59問、高校生に関しては内容を修正し56問の構成で尋ねており、これらについて、単純集計、平均値の比較、因子分析、回帰分析等を用いて定量分析を行ない、職業選択の具体的な考え方や、観光業と農業に関する考え方をまとめた。これらの調査を通して、近い将来に職業選択をする予定で、まだ働いていない高校生と大学生の考え方が把握できた。しかしながら、実際に働いている立場の考え方を知ることができていない。今回は、現在までの調査結果から大学生高校生共に人気の職業であった、観光業に就職した若者を対象とした質的調査を実施した。2018年8月に実施した、インタビュー調査結果（n=10）を報告する。結果は問題解決手法のKJ法で要因分析を用い、定量化を行える内容は統計解析を用いて分析し、観光業の理想と現実、将来の展望などについて就職前と後の気持ちの変化について考察した。さらに、本研究の対象はバリ島であるがインドネシア共和国内であり、他の観光地での考え方の傾向を捉えることを試みた。バリ島の隣で首都ジャカルタがあるジャワ島のバンドン市の大学生を対象として、バリ島で行なった同じアンケートを用い、2019年2月にアンケート調査を行った（n=139）。この調査の分析結果をバリ島の結果と比較した。本研究の目的は、1点目の職業選択に対する意識調査では、バリ島の若者の職業選択の現状をまとめる目的として、職業選択の考え方、およびその考え方がバリ島独自のものかどうかの可否を調べること。2点目の観光業で就労する者へのインタビュー調査では、どのような自己効力、ストレスや行動計画を有しているのかを定性的に調査することを目的として、職業選択時に将来の夢を描くが実際に選んだ就労先での現状や、職場での課題や問題点を調べ分析することであり、これらの結果から、バリ島における若者の職業選択に関する体系的な傾向を捉えることにある。本調査結果から、インドネシアの観光地としてバリ島とバンドン市を対象としたが、観光地周辺に居住する大学生は、所属学部にかかわらず観光業を選択する傾向が得られ、職業選択の考え方はバリ島独自の考え方ではない可能性が示唆された。さらに、学校時代に観光業を志して、実際に観光業で就労している者は、給料や仕事内容に不満を持つ者が多く、半数は異業種の自営業で独立をすることを考えていた。高卒でも専門卒でも大卒でも共通して考えられることは、学校時代に考える観光業での就労は素敵な印象があり希望的観測が高いが、実際の就職後には、給料額に満足することはなく、かつセクション主義に縛られた組織構造の中で働く可能性が高く、その不満に遭遇すると転業する可能性があることがわかった。

Consciousness survey of working in Tourism industry in Indonesia.

Yoko Mayuzumi Bunkyo University*

Takeshi Mizunoya University of Tsukuba

Yoshiro Higano University of Tsukuba

Recent years, there is a subject about economic development for tourism industry and concentration of labor populations, decline of agriculture with it, in international tourism destination in developing country. In this study, we conducted a consciousness survey by conducting questionnaire in Bali province in Indonesia to know “the way of thinking about work values for career choice” in local residents. This questionnaire was conducted for local undergraduate students and local high school students, and the contents is classified in 5 contents (1. Face Sheet, 2. idea of work values, 3. working in the tourism industry, 4. working in agriculture industry, 5. the idea for tourism mixing agriculture,) and has 59 questions in total. These were subjected to quantitative analysis using simple tabulation, comparison of average values, factor analysis, regression analysis, and the like. Based on the results, we discussed a concrete idea of career choice about tourism and agriculture. There are two purposes for this study. The first survey on career choices is to learn about the career choices of university students residing in Indonesian tourist destinations other than Bali, and to check whether the idea is unique to Bali. The second survey is to qualitatively investigate what kind of self-efficacy, stress and action plan they have for their career choice by interview for those who work in the tourism industry, we will. From these results, the systematic trend of youth career choice in Indonesia was to be captured. In these surveys, although Bali and Bandung are targeted as Indonesian tourist destinations, university students who live in the vicinity of tourist destinations tend to choose tourism industry regardless of their faculty, and it was suggested that career choice trends are not unique to Bali. Furthermore, many people who were interested in tourism in school days and are actually working in the tourism industry are dissatisfied with their salary and work content, and half of them are thinking that they want to have their business in different industries. What is commonly thought of by high school graduates, vocational school graduates, and college graduates is that the employment in the tourism industry considered during school days has a nice impression and high hopeful observation. However, after actual employment, they are not satisfied with their salary. In addition, there is a high possibility of working in an organizational structure bound by sectionism. If they have these complaints, they may change jobs.

1. はじめに

本研究では、発展途上国の世界的観光地、インドネシア、バリ島における、国家政策に始まって成長した観光業の発展と、それに伴う現地住民の生活を支える自給自足の農業の衰退、これらに応じて変わる若者の職業選択に着目している。職業選択を行う立場にある現地住民の若者の職業価値志向を知る意識調査に2015年より取り組んでいる。現在までに本研究では、バリ島住民で卒業後に就職機会をもつ可能性がある、大学生と高校生を被験者に設定し意識調査を行った。バリ島全土からの平均的な考え方が得られるように、大学生はバリ州（インドネシアの地方行政区画、州は最上位の地方自治体）にある国立と私立の中大規模の9つの大学、高校生はバリ州におけるすべての、9つのカブパテン（県）で各1校以上の国立普通高校上位レベルを対象とし、意識調査を行った。大学生の調査は2016年5月、高校生は2017年6月から2018年2月にかけて行ない、調査票を回収した大学生被験者は406名、高校生は419名であった。調査では、「職業選択の考え方」「観光業に関する職業の印象」「農業に関する職業の印象」「農業と観光業の融合（アグロツーリズム）の印象」等に関する内容、大学生に関しては59問、高校生に関しては内容を修正し56問の構成で尋ねており、これらについて、単純集計、平均値の比較、因子分析、回帰分析等を用いて定量分析を行ない、職業選択の具体的な考え方や、観光業と農業に関する考え方をまとめた。

これらの調査を通して、近い将来に職業選択をする予定で、まだ働いていない高校生と大学生の考え方が把握できた。しかしながら、実際に働いている立場の考え方を知ることはできていない。今回は、現在までの調査結果から大学生高校生共に人気の職業であった、観光業に就職した若者を対象とした質的調査を実施した。2018年8月に実施した、インタビュー調査結果（n=10）を報告する。結果は問題解決手法のKJ法で要因分析を用い、定量化を行える内容は統計解析を用いて分析し、観光業の理想と現実、将来の展望などについて就職前と後の気持ちの変化について考察する。

また同時に、本研究ではバリ島を対象としているが、バリ島の被験者をインドネシア人として考えた場合には、島の外の被験者との比較が課題となる。今回は、本研究の対象はバリ島であるがインドネシア共和国内であり、他の観光地での考え方の傾向を捉えることを試みた。バリ島の隣で首都ジャカルタがあるジャワ島のバンドン市の大学生を対象として、バリ島で行なった同じアンケートを用い、2019年2月にアンケート調査を行った（n=139）。この調査の分析結果をバリ島の結果と比較しながら報告する。

本研究では、若者の職業選択に対する意識構造や就労後の意識をも明らかにし、インドネシア共和国の若者の職業選択への考え方の一例を示す。同時に、観光地に在住の考え方の傾向を探りながら、就労後の意識の変化も追うことで、職業選択の問題点や課題を見いだす。本研究の成果は、同じ様な事情を抱える発展途上国の国際観光島における若者の職業選択についての事例研究となるため、発展途上国における持続可能な観光業と農業の発展への知見として提示することを意図している。

2. 先行研究

本稿の問題提起は2点あり、1点目は、若者の職業選択に関する意識調査をバリ島外にまで拡大し、観光地に居住するインドネシアの若者に関する、同量的データを分析することでその意識を明らかにすることである。2点目は、バリ島の若者が就職を経た後の意識の変化を質的データによって明らかにすることである。これらによって、インドネシア共和国の若者の職業選択への考え方の一例を示すことを目的としている。

上記1点目に関連する先行研究としての就職研究は、日本においては大学生を焦点に当てられたものが多い。日本で職業選択に関する研究が取り組み始められたのは、1980年代（例えば下山1986）の大学生を対象とする職業選択研究で、その後現在に至るまで心理学や社会学で多くの研究がなされている（例えば安達2003、2004 藤森1983 安田1999等）。本調査での質問項目は内容理論と過程理論の考え方を検討し、職業を考える際の「経済的価値」や「社会的責任」、さらに「家族の影響」と「自分自身の価値観」が反映され、定量化可能な質問項目を準備した。また、調査手法では、自分の仕事に求める重要な価値を尋ね、その価値に関わる気持ちの大きさを尺度で

回答するリッカートスケール方式が用いられており、この方法を採用した。

2点目の就職後を扱った研究には、自己効力、情報収集、不安・ストレス、ソーシャルサポート等に関する研究が蓄積されている(2015 高橋)。この中で、組織への参入者が適応していく過程についての概念として「組織社会化」に関する論点が着目されている。また、古典的な職業発達理論によれば、初職に就いてからしばらくの時期は、何度か職を変わりながら、暫定的職業選択から永続的職業選択を行う時期とされている(Super, 1957)。これらの理論を背景とし、若者が組織に属して組織の一員として過ごす中で、どのような自己効力、ストレスや行動計画を有しているのかを定性的に調査することを目的として、インタビュー調査を準備した。

3.本研究の目的

3.で述べた様に、本稿の問題提起は2点あり、1点目は、若者の職業選択の意識調査をバリ島外にまで拡大し、観光地居住のインドネシアの若者として量的データを分析することでその意識を明らかにすることである。2点目は、バリ島の若者が就職を経て、その後の意識の有様を質的データによって明らかにする。バリ島における若者の職業選択に関する体系的な傾向を捉えることが、本稿の関心事である。

1点目：バリ島以外の観光地居住のインドネシアの若者の職業選択の意識調査（定量化）

バリ島の若者の考え方との違いを下記の点を中心に比較分析を行なう。

- ① 職業選択における考え方
- ② 観光業を職業として選択する際の考え方

2点目：バリ島の就職後の若者の意識調査（定性化）

以前の調査結果より、バリ島で一番人気がある職業であった観光業に着目し、就労先の現状、職場での課題や問題点について、下記の点を中心に調べる。

- ① 職場の満足度
- ② 社会的立場としての課題
- ③ 転職または将来の展望

また、本研究の仮説を2点の視点について、下記に設定する。

1点目：バリ島以外の観光地居住のインドネシアの若者の職業選択の意識調査（定量化）

「発展途上国の世界的観光地のバリ島の若者（特に大学生）は、職業選択において収入が高い観光業を選び、これはインドネシアの他の島の観光地の若者とは考え方が異なる特異な傾向である」

2点目：バリ島の就職後の若者の意識調査（定性化）

「バリ島で観光業に就いた若者は、企業クラスや職務内容によって不満の度合いが異なる。不満が多い者は自営業に転職もしくは独立することを検討している。」

5. 調査計画

5.1 1点目：バリ島以外の観光地居住のインドネシアの若者の職業選択の意識調査（定量化）

本調査の依頼に受諾を得たインドネシア共和国バンドン市にある、インドネシアでの大学ランキング4位である、インドネシア教育大学の生物教育学部（Universitas Pendidikan Indonesia, Department of Biology Education）を対象に、2019年2月にバリ島と同じ内容のアンケート調査を実施した（n=139）。バンドン市は、かつてオランダに「ジャワのパリ、Paris van Java」と呼ばれた。人工的な観光地と自然の観光地、さらに教育の街としても有名である。バリ島と環境が似ている点も、被験者の選定理由である。意識調査のアンケート内容は、バリ島で行なった意識調査と同じものを用いた。

5.2 2点目：バリ島の就職後の若者の意識調査（定性化）

意識調査のインタビュー内容は、どのような自己効力、ストレスや行動計画を有しているのかを定性的に調査することを目的とするため、就労先の現状、職場での課題や問題点、将来の計画や展望について尋ねた。選定は、本調査の説明を行い、理解し、スケジュールを調整可能でインタビューを希望した者を被験者とした。その結果10名（男性9名、女性1名）から得られ、それぞれ40分前後の対面式のインタビューを実施し、各質問に対してインタビュアーが質問と回答を聞き、筆記者が回答内容を確認しながら書き取りを行なった。

6. 調査結果

6.1 バリ島以外の観光地居住のインドネシアの若者の職業選択の意識調査（定量化）

バンドン市の大学生を被験者（n=139）とする得られたデータに関して、単純集計、平均値の比較、因子分析、回帰分析を用いて分析を行なった。データの信頼性係数は、バンドンの大学生の結果は0.921、（クロンバックのアルファ係数）であり、アンケート調査の信頼性の高さは担保された。

6.1.1 職業選択の考え方

イ) バンドンの大学生とバリ島の大学生が希望する職業の比較

双方の被験者が希望する職業は共通して、観光業、公務員、次に医療関係の職業の人气が高かった。バリ島の大学生は49.6%、バンドンの大学生は39.7%が観光業を希望していた。バリ島は49.6%が観光業に就くことを希望していたが、これは被験者の中に観光専門大学2校（95名）が含まれている影響（専門を問わず本調査依頼の受入れ可能な学力が上レベルの大学を対象としたため）を考えると、同じ程度の割合と推測される。これに比較し、農業を希望したのはバリ島の大学生は1.2%、バンドンの大学生は5.0%であった。バンドンの大学生は、インドネシア教育大学の生物教育学部の学生であるが、観光業に就くことに非常に関心が高いことがわかり、かつ、希望する職業の傾向はバリ島の大学生とほとんど同じであることがわかった。

表1 「職業選択の考え方」因子分析の結果
バリ島の大学生とバンドンの大学生の比較

	バリ島の女子大学生 n=223			バンドンの女子大学生 n=113		
	第1因子	第2因子	第3因子	第1因子	第2因子	第3因子
華やかさ	0.026	0.575	0.08	0.625	0.171	-0.233
若さ	0.037	0.985	-0.024	0.515	-0.038	0.018
都会志向	0.364	0.063	0.029	0.075	0.045	0.529
外部への自慢	0.366	0.086	0.236	0.669	-0.145	0.224
金銭目的	0.722	0.107	-0.089	0.167	0.344	0.212
家族貢献	0.861	-0.108	-0.008	0.001	0.896	-0.035
社会貢献	0.473	0.093	0.019	0.518	-0.007	-0.021
宗教活動貢献	0.595	-0.004	-0.24	-0.114	0.3	0.469
自らの職業決定権	0.402	-0.057	0.388	0.455	-0.074	0.008
家族による職業選択	0.164	-0.063	-0.506	-0.048	0.09	0.605
因子寄与率 (%)	35.1	13.0	10.3	30.2	13.7	10.9

バリ島の女子大学生（標本妥当性0.791；有意確率0.000）／バンドンの女子大学生（標本妥当性0.714；有意確率0.000）
最尤法 プロマックス回転

表2 観光業に就く理由 回帰分析の結果
（従属変数：自分の夢は観光業で働く事である）

	バリ島の大学生 標準化係数	バンドンの大学生 標準化係数
収入の高さ	-0.036	0.074
自分が働くことを決めている職業	0.397	0.495
一般的に夢の職業印象	0.1	0.042
将来性のある職業	0.054	-0.078
素敵な印象のある職業	0.315	0.05
農業より魅力的	-0.055	-0.108
村の将来のために選ぶ職業	0.068	0.141
就業環境が良い	-0.073	-0.168
世間的に希望者が多い	0.071	0.011
多くの友人が希望	0.034	0.181
家族を持てる事が出来る職業	0.136	0.138
今ではなく将来的に希望する職業	-0.021	0.21
貧困家族のために働く	0.094	-0.312
家族の期待に答える	0.013	0.338

R²=0.807 R²=0.872
n=397 n=136
有意確率0.000 有意確率0.000

ロ) 「職業選択の考え方」の質問群における回答傾向

次に、「職業選択の考え方」に関する10の質問群について、因子分析の最尤法（プロマックス回転）を用いて分析した結果を表1に示す。被験者のバンドンの大学生における男女比は、被験者n=139の内、男子n=21 女子n=118 であるが、男子について分析を行なった結果、適合度の有意確率に問題があり結果を示すことができなかった。このため女子の結果を示し、バリ島の大学生の女子の結果と比較する。バンドンの大学生における女子n=118の傾向（標本妥当性0.714 有意確率0.000）は3因子得られた。第1因子は30%の考え方を反映しており、職業選択での重要な点は、「社会的存在として外部に自慢できる華やかな職に就くこと」、であった。続いて、バリ島の大学生

学生（標本妥当性 0.791 有意確率 0.000）は 3 因子得られた。第 1 因子は 35%の考え方を反映しており「家族の家計を助けること」、バンドンの大学生は自分のキャリアを、バリ島の大学生は家族の家計を助けることを主軸に考えて職業選択を行なう傾向が強いと推測された。大学生双方に共通する点は、職業選択は家族を助けるためという気持ちが大きく、かつ、若いうちは外部に自慢できる華やかな世界に挑戦する、という考え方を持っていることがわかった。

6.1.2 観光業を職業として選択する際の考え方

イ) 観光業で就労することの印象

観光業に就くことを想定した質問群の 15 問について、「自分の夢は観光業で働く事である」を従属変数、その他 14 問を独立変数として回帰分析（最適尺度法）を行なった（表 2）（有効回答数、バリ島大学生 n=397、バンドン大学生 n=136）。その結果、バリ島の大学生は、「素敵な印象を持っていて、自分で働くことを決めている職業」と考え、バンドンの大学生は、「家族は貧困ではないが、家族の期待に応えたく、自分が働くことを決めている職業」、と考えていた。双方とも理由は異なるが、最終的に自分の意志で観光業を選ぶということがわかる。

6.2 バリ島の就職後の若者の意識調査（定性化）

被験者 10 名にインタビューし、観光業で就労した後の問題と課題の抽出を行なった。

表 3 インタビュー調査 一般質問事項の回答傾向

	年齢	学歴	性別	親の職業	勤務先クラス	将来展望	実家の継承	居住エリア	給料額	希望給料額
		専門高校:1, 1年専門学校:2, 2年専門学校(短大):3, 3年専門学校:4	男:1, 女:2	自営業:1, 公務員:2	1-2star:1, 2-3star:2, 4star以上:3	出世:1, 独立:2, 検討中:3	継承責任有り:1, 継承責任無し:2	観光地内:1, 観光地外:2	単位:juta	単位:juta
1	22	3	1	1	3	3	1	1	2	3.5
2	22	1	2	1	2	2	2	1	3.5	5
3	25	2	1	1	2	2	1	1	2.4	3
4	23	3	1	1	2	2	2	2	3.6	5
5	25	1	1	1	1	2	1	2	2.5	4
6	21	3	1	2	2	2	1	1	3.5	7
7	24	1	1	1	1	1	1	2	4.5	6
8	21	2	1	1	1	2	2	2	4	5.5
9	22	4	1	1	2	2	1	1	2.1	
10	22	4	1	1	2	1	1	1	3.8	5

a. 一般質問事項の回答傾向

一般質問事項の回答傾向を表 3 に示す。被験者の平均年齢は 22.7 歳であり、9 名が宿泊業、1 名が飲食業であった。学歴は、観光専門高校 3 名、1 年間の観光専門学校 2 名、2 年間の観光専門学校 3 名、3 年間の観光専門学校 2 名であった。一般質問事項の回答傾向について、Kruskal-Wallis 検定を行い平均値の比較を行なった結果、「居住エリア」と「将来展望」、「給料額」と「希望給料」、「勤務先クラス」と「居住エリア」、3 点に有意差 (p<0.05) が得られた。これらの結果から、観光地から遠い場所から通っている者は将来独立思考が高い、現在の給料よりも 1,500,000 ルピア以上の給料を望む、居住エリアが観光地内であると高い勤務先クラスで就労が可能である、という点が示唆された。さらに、独立を考えている被験者の観光業に就く前と就いた後の印象の違いは、7 名中 5 名は何らかの不满を持っており、他の業種の自営業で独立することを考えていることがわかった。

表4 独立を考えている被験者の観光業に就く前と就いた後の印象の違いと独立後の職業

	現在の職務内容	印象の違い	独立後の職業
2	ウェイトレス (リーダー)	同じ。まあまあ忙しいが、その割にお給料は良い。	インフォメーションセンター (ツアー提供) の様なものを経営したい
3	バーテンダー	同じ。勉強で実習が多かったから、実際の仕事はよく理解できていた。	レストラン経営
4	フロント・ベルボーイ・送迎サービス	専門学校で勉強したことが役に立たない。	結婚式写真や動画の写真スタジオ
5	ハウスキーピング	学校では、ポイントしか教えてもらえなかったのがよくわからなかった。観光業はローシーズンの時期が悪い時にお給料が少ない。	酪農で卵や鶏肉を売る。同時に農業で果物や野菜を売る。
6	レセプション・フロント	専門学校卒業だと接客までしか行けない。マナージャークラスになれない。	ガイド業
8	ウェイター	学生の時の勉強では4時間だけだったが、今は8時間以上の仕事をするのが大変。	アパレル業 (自らデザインをして店舗を持つ)
9	ハウスキーピング	観光業で働くことはとても良いと思っていた。実際に仕事したら、朝起きてやる仕事をして、それで一日が終わる。自由がない時間に縛られている。	コピー業、食堂経営

b. 観光業に関する事項の回答傾向

定性的に回答傾向を捉えることを意図し、問題解決のための質的分析方法として KJ 法を用い、その中でも特性要因図 (フィッシュボーン図) を採用した (図1)。

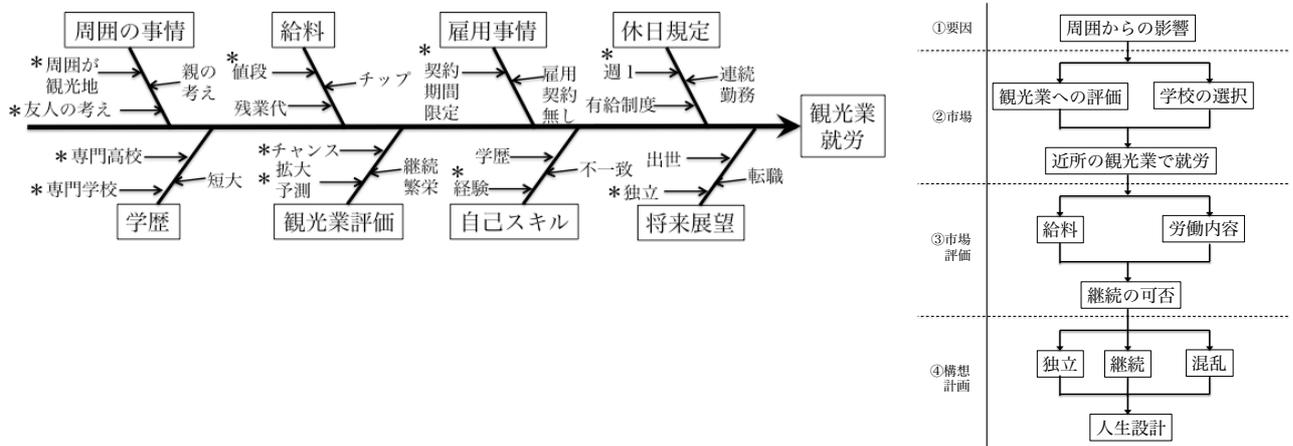


図1 観光業での就労に対する特性要因図 (n=10)

*は5名以上から同じ様な回答を得た事項

図1の右図について説明する。有名観光地に位置する周辺村で育ち、そこで就労している被験者6名は、「生まれた時から観光業で働くことが当たり前」であり、他の4名は「観光業がバリ島で発展していることを子供の頃から知っており、観光業で稼ぐことを考える様になった」と回答した。この点により、成長過程で観光業への評価が高まることや、そのことを要因として学校の選択を行ない、その後観光業で就労するに至っている。就労後は、給料の額や労働内容が大きな課題にのぼり、継続の可否を考える様になる。さらに、そこで考えることは「独立」「継続」「混乱」の3種であり、改めて自分の人生設計を考える様になる、という図式を描くことができた。

7. 仮説の検証

7.1 1点目：バリ島以外のインドネシアの若者の職業選択の意識調査 (定量化)

「収入が高い観光業」というキーワードに焦点を当てると、双方とも収入の高さには高い関心が無い結果を得た (表2)。これらの結果より、仮説は当てはまらず、インドネシアの観光地周辺に居住する大学生は、観光地の位置や学部に関係なく観光業を職業の対象として重視する傾向があることが示唆された。

7.2 2点目：バリ島の就職後の若者の意識調査（定性化）

「勤務先クラスや職務内容によって不満の度合いが異なる」という点については、勤務先クラスは関係なく、かつ不満の度合いは自分の専門部署で楽しんでいる者は不満が無いが、楽しめない者は不満を持っているため、この仮説はあてはまらなかった。本仮説の前半はあてはまらないが、後半はあてはまり、「バリ島で観光業に就いた若者は、自分の有する専門スキルを活かした部署で楽しめるか楽しめないかによって不満の度合いが異なる。不満が多い者は自営業に転職することを検討している。」ということが言えた。

8 考察

観光地周辺に居住する大学生は、所属学部にかかわらず観光業を選択する傾向が得られ、職業選択の考え方はバリ島独自の考え方ではない可能性が示唆された。さらに、学校時代に観光業を志して、実際に観光業で就労している者は、給料や仕事内容に不満を持つ者が多く、半数は異業種の自営業で独立をすることを考えていた。

さいごに、本意識調査においては、農業体験を観光業に取り入れたアグロツアーについても尋ねている。本稿ではこれを扱っていないが、双方の大学生は非常に関心が高く、その必要性、およびツアーの実施やその方法論を学ぶことに強い意志を示していた。農業人口の減少、若者の関心の低さを解決していくためには、このように観光業を取り込んだ形での農業のツーリズムを考えることを、今後、農業政策の方面から提案していく必要があるだろう。

参考文献

- 2) 安達智子 (2003) 『大学生の職業興味形成プロセス』 教育心理学研究 51 pp308-318
- 5) 浦上昌則 (1995) 『学生の進路選択に対する自己効力に関する研究』 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科 42 pp115-126
- 7) 下村英雄・木村周 (1997) 『大学生の就職活動ストレス とソーシャルサポートの検討』 進路指導研究 18 巻 pp9-16
- 8) 高橋南海子 (2018) 『大学生の就職活動に関する実証的研究の動向と課題』 明星大学明星教育センター研究紀要, vol18, pp1-15
- 9) 永野由紀子 (2007) 『インドネシア・バリ島におけるグローバル・ツーリズム下での移住者の増加と伝統的生活様式の解体』 山形大学紀要 (社会科学) 第1-4巻2号
- 21) Super, D. E. (1980) “A life-plan, life-space approach career development” Journal of Vocational Behavior 16 (3) pp282-298.

*本研究は、インドネシア政府認可環境財団 Bali Biodiversitas と現地で共同の調査研究を行なっている。